



『子ども虐待予防の新たなストラテジー』

評者・福島 富士子 国立保健医療科学院公衆衛生看護部ケアシステム開発室

本書は「子ども虐待予防」をテーマに、取り組みの歴史や地域の潜在的ニーズから見た問題を提起し、多職種・多機関連携による虐待の予防活動を提唱し、今後の課題について、深い視点で書かれた専門書である。

著者は1970年代から「子どもと家族」を対象とした日本の地域における発達と支援に関して30年以上にわたる長期間の追跡的研究を行っており、また地域での施設間の連携についても膨大な実践と研究の積み重ねがある。この研究成果をもとに、子ども虐待対策について具体的に解説がされている。

文中で、多職種・多機関の連携の重要性について触れ、国の縦割り行政・縦割り専門家教育の伝統を特徴とする日本では、連携がいかに困難であるかを述べている。著者はそれを実践現場において肌で感じてきており、連携で遭遇する問題をどう解決したらよいか、自らの体験を交えて述べている。継続ケア、支援ネットワークの重要性が指摘されている昨今、助産師がどのように役割を担っていくのかを考えるうえで参考になる。

本書が子ども虐待に関する多くの本と異なっているのは、虐待発覚後の対応策ではなく「虐待予防」を目標としている点である。著者の長年の実践、研究のベースには、問題を抱えた親子にも、自分たちの手で問題を解決する潜在的

地域ネットワークの一員として
助産師が担うべき役割を示唆



上田礼子 著
定価 2940 円(本体 2800 円+税 5%)
A5 判/医学書院/2009 年

な力があるはずで、予防のポイントはその力を強めることである、というスタンスがある。そして、その考えが正しかったことも本書のなかに示されている。

また、子どもの「強靱性」に言及している部分では、虐待を受けた子どももそれを発揮して成人し、大人の世界によく適応した事例が米国にあることを取り上げ、「子どもは逆境にあってもそれを克服し、長期的にみるとたくましく成長・発達できる可能性を秘めている」ことを主張しており、これが支援者にとって重要な考え方であることも伝えている。

虐待の世代関連連鎖が強調されている今日であるが、人は人によって苦難を与えられるばかりではなく、人によって生きる力を与えられることもある。今を生きる大人たちの働きが次世代の子どもたちの未来に希望をつなげられるか否か、そのどちらにも可能性があることをあらためて実感した。「子どものニーズ」を最優先し、虐待予防の地域ネットワークの実質化に向けて、大人たちは連携、協働し、未来に責任を持たなければならない。

専門書は難解で読みにくいことが多いが、本書は、わかりやすく大変読みやすい。子ども虐待についての入門書としても、虐待対策に取り組んでいる専門家にも新たな視点を与えてくれる。虐待予防に向けて活動することが求められる助産師にとって、必読の一冊だろう。